



井の頭自然文化園開園100周年カウントダウン新聞

井の頭 吉祥寺 鷹

23号 2015年7・8月号

2015年(平成27年)7月1日

●編集・発行
いのきちさん編集委員会
編集長 川井信良
東京都三鷹市上連雀 1-12-17
株式会社文伸 発行
電話 0422-60-2211
FAX 0422-60-2200
メール inokichi@bun-shin.co.jp

●協力
東京都西部公園緑地事務所
東京都井の頭自然文化園
井の頭恩賜公園100周年実行委員会
NPO 法人みたか都市観光協会
一般社団法人武蔵野市観光機構

●制作支援
株式会社文伸 / ふんしん出版

井の頭恩賜公園開園100周年まであと1年10ヶ月

最終回

INFORMATION 2015年7月~8月

井の頭自然文化園

●怪談スタンプラリー
「動物園怪談画劇 ~井之頭百物語・参~」
井の頭自然文化園にまつわる、様々な創作怪談を読みながら園内を回することで、動物や施設の特徴を知ることができます。普段と違った動物園を感じてみませんか?



日時 平成27年7月18日(土)~8月30日(日) 各日9時30分~
ラリーブック配布場所 ●動物園(本園) 正門先広場 ●水生園(分園) 七井門先

ユニクロ吉祥寺店に、井の頭自然文化園がやってくる!

7月1日より、4階に井の頭自然文化園のキッズスペースが登場します。モルモットのぬいぐるみやパズル等、動物園の魅力を感じる楽しいコーナーです。お買い物の際に、是非おいで下さい。



*イメージです

詳しくはホームページをご覧ください。http://www.tokyo-zoo.net/zoo/ino/index.html

井の頭恩賜公園

【ネイチャー☆プログラム】次世代を担う子供たちや公園を訪れる人たちに、わかりやすく楽しく「自然の仕組み」を学び遊んでもらうプログラムです。

- あおぞら実験室(井の頭池付近) 7月5日(日)、8月2日(日)、9月6日(日)
- グリーンバード(井の頭池付近) 7月12日(日)、7月26日(日)、8月9日(日)
8月23日(日)、9月13日(日)、9月27日(日)
- どんぐり広場(御殿山広場) 7月9日(木)、9月3日(木)
- ツリー☆マジック(第二公園) 7月5日(日)、8月1日(土)、8月2日(日)
9月5日(土)
- ツリートレック(第二公園) 7月12日(日)、8月9日(日)、9月13日(日)

詳しくはホームページをご覧ください。http://www.i-np.jp/index.html に載せます。

- 野外劇フェスタ(風煉ダンス「泥リア」)(文化交流広場) 9月19日(土)~28日(月)

井の頭かんさつ会

- 第123回「変形園」7月19日(日) 10:00~12:00
- 第124回「植物と動物の夜の不思議」8月8日(土) 18:30~20:30

事前申し込みが必要です。詳細や申し込み方法はHP http://www.kansatsukai.net/ に載せます。

募集 井の頭公園の古い写真を集めています

2017年の井の頭恩賜公園開園100周年を記念して、井の頭公園の今昔を伝える写真集を刊行する予定です。井の頭公園の古い写真をお持ちの方で、写真集に掲載しても良い方はご一報願います。なお、お借りした写真は、スキャン後、速やかにご返却いたします。また、謝礼として、完成した写真集を謹呈いたします。

お問い合わせ ふんしん出版 ☎0422-60-2211 (担当:宮川) 〒181-0012 東京都三鷹市上連雀 1-12-17

井の頭自然文化園の動物たちと飼育員 その4

オリオオコウモリ と 田口真隆さん



オオコウモリ舎を見上げると、天井から逆さに吊り下がるオリオオコウモリが目に入ります。広げると70~80cmにもなる黒い翼を、腕組みのように折り畳んだ間からは、茶色のふさふさの体毛と、つぶらな瞳、突き出た鼻のぞきま。

夜行性のため、動き出すのは閉園間際の夕方から。フルーツバットの異名の通り、バナナやパパイヤ、リンゴや蒸かしイモが好物で、エサが運ばれると逆さのまま歩み寄ってきます。片足でぶら下がり、もう一方の足でエサを口まで運びます。「かじって、エキスだけ吸って、固形は吐き出すんですよ」と田口真隆さん。オリオオコウモリは飛ぶのは上手だけれど、飛び上がるのが苦手なため、体を重くしないための工夫なのだとか。

沖縄だけに生息する亜種で、今年生まれた2頭を含めて、井の頭には7頭が暮らします。もし近づいてくる1頭がいたら、それはオリオ君。赤ちゃんのころに保護され、人の手で育てられたオリオ君は、「自分のことをコウモリだと思ってないみたい。愛嬌を振りまくんです」。田口さんが作業中でもおかまいなしで、服を甘噛みしたり、帽子を取っていったり、首をくすぐったりと、ちょっかいを出し続けるそうです。

小田原 濤 (おだわら みお) 編集者・ライター。フィールドは多摩。三鷹市在住。

23 今月の「はな子」

運動場の鐘を鳴らすのは?

アジアゾウの「はな子」の運動場には、ホースが置いてあったり、大きな角材が置いてあったりと、「はな子」の興味関心に応じて、遊んでもらえるような道具が置いてあります。特に、午前中の早い時間に遊んでいることが多い気がします。

そんな運動場の正面奥の木に鐘が下がっているのをご存知でしょうか。ヒモの劣化等の事情により、ヒモを外して、さわれない状態が続いていました。今回、復活しました。

ヒモを付けたのは、2015年5月2日。久しぶりにヒモが付いたので、きつとすぐに鐘を鳴らしてくれるのではないかと期待して待っていましたが、なかなか鳴らしません。なんと、鳴らしたのは、5月9日のことでした。

その後は、全く興味が無いのか、鳴らしたのを確認していません。もし鳴らしているのを見つけたら、教えてください。

(井の頭自然文化園 教育普及係 大橋直哉)



その23 井の頭公園の生き物たち クサガメ

井の頭かんさつ会 田中 利秋 (たなか としあき) 井の頭かんさつ会代表。毎月自然観察会を開催。池の外来魚問題にも取り組む。

微妙な立場

甲羅に盛り上がった縦筋が3本あること、首筋に黄緑色の複雑な模様があることなどがクサガメの特徴です。ただし、老熟したオスは全身が真っ黒で、メスほど大きくなりません。上の写真のクサガメは、ひょうたん池に住み着いているメスです。甲羅にかつての生息調査で明けられた孔があるので個体識別が可能です。この135番さん、ひょうたん池に設置しているアメリカザリガニ捕獲ワナに頻繁に入ります。ワナの中のザリガニを食べるためです。人間に捕まってもすぐに放してくれると分かっている、繰り返し入るのです。漢字で書く

23 変則

「楽園はよみがえるか! カイツブリ通音」

カイツブリは、得意の潜水で小魚やエビを捕まえる。小さな水鳥です。池や川にカップルで縄張りを作って暮らし、子育てをします。

心配したとおり、今年のモツゴ稚魚の発生数は昨年と比べるとごくわずかです。しかし今年のカイツブリたちは外来魚の稚魚をけっこう食べており、決定的な食糧難には陥っていないようです。とはいえ十分でもないようで、彼らの生活はどこかおかしいです。産卵数が少なめで、孵らなかつた卵も多いのです。6月21日現在、3組のカップルが繁殖に挑戦中ですが、とくに変則なのが、お茶の水池で子育てをしている「上流ペア」です。

彼らは前回の繁殖でヒナを1羽孵したものの、残る2個の卵は孵りませんでした。そして、そのヒナの誕生からわずか16日後に後に次の卵を1個産んだのです。現在、彼らは一人っ子の世話と抱卵を同時にこなしています。カイツブリがこれほど短い間隔で次の卵を産んだ例を私は知りません。忙しいせいでしょうか。抱卵している時間も長く、そんな状態ではたして卵が孵るのか気になります。この号が出るころには結果が分かっているでしょう。

バス稚魚を給餌

井の頭かんさつ会 田中 利秋 http://homepage2.nifty.com/tnt-lab/

と「臭亀」で、危険を感じると四肢の付け根から臭いにおいを出すのですが、135番さんは今や捕まってもまったくにおいを出しません。安心しきっているのです。

昨年秋、ワナに入った大切な在来種まで食べてしまうのに困り果て、ほかの池とは仕切られている弁天池に放したことがあります。ところが、翌々日には再びひょうたん池のワナに入っていました。では神田川源流の堰は上がれるのかと水門橋の直下に放してみたら、雨で水量がとても多い日だったため、下流へと流されていってしまい、二度と戻って来ませんでした。しかし、今年の4月にザリガニワナの設置を再開したら、さっそく135番さんが入っていたので驚きました。

とても賢く、ファンも多いクサガメですが、じつは今、微妙な立場にあります。長い間日本古来のカメだと考えられていたのに、最近の文献調査と遺伝子解析で、江戸時代後期に朝鮮半島から連れてこられた外来種であることが判明したのです。関東地方には1970年代に中国から輸入された系統も生息しているそうです。外来生物法では、明治以降に日本に持ち込まれた生物を外来生物としているため、江戸時代ならぎりぎりセーフです。しかし、何より困るのは在来種のニホンイシガメと交雑することで、イシガメを守りたい場所ではクサガメを除去する取り組みが始まっています。



黒化したオス

連載給本 カワセミのミドリリ巻

やつと育ち始めたヒナをアオダイショウに襲われ、悲しみに暮れるミドリリをセミソウは井の頭池 誘いました。ミドリリを慰める姿を見ていたカイツブリのヒナが、「ボクの親は子育てでもせずにもう次を産むんだ。カワセミも頑張れ!」と言って水に潜りました。ミドリリとセミソウは、思わず顔を見合わせ頷きました。

絵せのうさこ 文瀬能けい子

せのうさこ 1975年 盛岡市で生まれる。小6で三鷹へ転校。アニメ動画から絵本に進む。三鷹市在住。瀬能けい子さんは母親。

時代を超えて踊り継がれる「井之頭音頭」

夏といえば、盆踊り。井の頭公園の周辺地域では、「東京音頭」や「ドラえもん音頭」と並んで、「井之頭音頭」が今も踊り継がれています。
作詞は野口雨情。七ツの子、「シヤボン玉」、「赤い靴」などの童謡でも有名な詩人は、この地域に住み、公園をしばしば訪れていたそうです。



◀ 48歳の野口雨情
【北茨城市歴史民俗資料館／野口雨情記念館所蔵】

【井の頭音頭】のレコード ▶
【井の頭公園まるごとガイドブック】より
／武蔵野市立図書館所蔵】

大正末期から昭和にかけて、自治体や企業などが地元のPRのために歌を制作するのが大流行しました。観光名所、自然、特産物などを歌詞に織り込み、音頭調や小唄調のメロディーで仕上げた「新民謡」の数々が、レコードの普及とあいまって全国各地で生まれました。昨今の「ゆるキャラ」「ご当地キャラ」の百花繚乱にも似ています。

そんな「ご当地ソング」のブームに応えた作詞家の一人が、野口雨情でした。生地の北茨城市磯原町の記念館の「生い立ち&年譜」によると、雨情が手がけた新民謡は「全国各地で数百編」。まさに数えきれない多作だったことが分かります。

明治15（1880）年生まれの野口雨情は、紆余曲折の後、大正13（1924）年から20年、武蔵野市吉祥寺北町に暮らしました。書齋「童心居」は、自然文化園に移築されて今も公開されています。武蔵野市立第一小学校では、雨情作詞の校歌が歌い継がれています。

雨情は、よく井の頭公園に客人と連れ立って、池の西北にあった茶店「明水亭」を訪れたそうです。そして、現在は藤棚になっているその場所の近くに、「井之頭音頭」の石碑が立っています。昭和27（1952）年、七回忌を機に、作曲家の中山晋平、森義八郎、作家の住井すゑらが雨情会を発足して建てたもので、刻まれているのは自筆原稿を写した5番の歌詞です。

「ないて騒いで 日の暮頃は
よこによしきり 離りやせぬヨ」

「井之頭音頭」が発表されたのは昭和10（1935）年。80年も昔になりますが、今も変わらず「広い東京の 気晴しどころ ここは公園 井之頭ヨ」。もうすぐ百周年の公園とともに、ご当地ソングも大切に伝えていきたいですね。

安田知代

安田知代（やすだちよ）
編纂者・ライター。「井の頭公園まるごとガイドブック」編纂かしの記者。昭和29・40年生。編纂者。

私と井の頭公園 その23

夏の夜は弁天様からお稲荷さんまで泳ぐんです

岩崎菊男（三鷹市在住）

昔の井の頭を知りたかったら、鷹の岩崎菊男さんに聞け。井の頭在住の複数の方からそう聞かされていた。井の頭弁天前で生まれて74年。歴史ある井之頭町の町会長として、町をまとめ、町を伝え、町を考え、常に町会を進化させている。昭和30年6月、今から60年前に創刊された『井之頭町会機関紙 井之頭新報』がまだ続いていることが、その進化を証明している。本年1月号の見出しは、「井の頭の縁を守り井の頭を心のふるさとに」であった。

私の祖母が弁天様の前で通いで茶店をやっていたんですよ、遠足や兵隊さんが相手で場所は弁天正面の階段の上です。お寺の周りは何もなく、狐や狸がうろうろして、大盛寺の住職が、「恐くて寂しいからここに住んでくれないか」と言われ、今のところに住み着いたと聞いています。私が小さいときもまだイタチがいて、よくニワトリが食われていました。

ものごころついたときは戦争で、空襲はうる覚えに覚えています。井の頭公園にも時限爆弾が落ちました。池のほとりの、いま藤棚があるあたりに茶店が2軒あったんですが、その茶店に時限爆弾が直撃したんですよ、爆発しなかったんですが土中にのめり込んだままなので、気味が悪いと引越した場所が七井橋北側で、今いせや側に2軒並んでいる茶店がそうだと聞いています。不発弾は、戦後大分たつてから掘り出されました。

井の頭池はきれいでしたよ、冷たくてね、藻が多くて下までは見えないんですよ。でも湧き水が出ているところは、水圧で藻がよけていましたね。その上を泳ぐと身体が持ち上がるくらい噴き出しているんです。池の中に入るとは禁止されていましたが夏の夜はよく泳ぎました。ただ夜中でもバチャバチャ音がすると園丁がすぐ来ますからク

ロールじゃなくて犬かきですね（笑）。弁天様からお稲荷さん（2013年5月焼失）まで泳ぐんですよ、そうすると涼しくなって寝られるんですね。とにかくよく公園で遊びました。残念ながら昭和38年に湧水が枯れて池が干上がったから水が汚れました。その後ポンプで汲み上げていますが間に合わないですね。「かいぼり」頑張ってくださいね。

（井之頭町会会長 ぐわびきくへん）

（聞き手・写真・川井信良）



川井信良（かわいしんりょう）
70年代80年代「三鷹」の「井の頭」や「みたかき」などを発行。



写真 古賀 親宗（こが ちかむね）
1983年 福岡県柳川市生まれ。三鷹市在住のフォトグラファー。

第4回「いのけん」の試験日が決まりました。

- 3・2級試験 12月13日（日） 三鷹産業プラザ
- 1級試験 12月13日（日） 武蔵野公会堂 ※共に午前・午後があります。

いのけん講座も決まりました。 フィールドワーク講座で現地のことを学び、講座で試験対策を!

- いのけんフィールドワーク講座
8月2日（日）「井の頭自然文化園」、8月9日（日）「井の頭恩賜公園の歴史と文化」、8月16日（日）「井の頭恩賜公園の自然と環境」
3講座とも9：30～11：30の予定です。
- いのけん3・2級講座 11月3日（火・祝） 13：00～17：00
- いのけん1級講座 11月8日（日） 13：00～17：00

いのけん

第4回
井の頭公園検定

試験日と講座の日程が
決まりました



▼ 白い円盤状の「透明度板」。
NPO法人生態工房の自作です。

よみがえれ！井の頭池 23

かいぼり23から1年半、池の透明度がぐんとアップ!

平成23年度のかいぼり（平成24年1～2月実施）の後、井の頭池ではいろいろな変化が起きていますが、中でも大きな成果として注目されているのが、水の透明度。以前は深緑色に濁っていましたが、今や、お茶の水池とポート池では白い円盤状の「透明度板」が池底に着くまで、およそ180cmの深さに至るまでしっかり見える状態に改善されました。かいぼりが実施されたかった弁天池では、今も80cm程度の水深までしか見えないのと比べると、劇的に改善されていることが分かります。

透明度が高まって池底まで光が通るようになると、水草が繁茂できます。そうすれば、水草を棲家とする在来種の水生生物が繁殖でき、さらに、それを捕食するカイツブリなどの水鳥も安心して住める池になります。水の透明度と生物の変化に、これからも注目していきますよ。

『いのきちさん』について

都立井の頭恩賜公園が2017年5月に開園100周年を迎えます。『いのきちさん』は、もうすぐ100歳を迎える井の頭公園に、感謝の気持ちを込めて、地域の市民と企業と団体の協力により発刊された100周年カウントダウン新聞です。名称は井の頭公園の「いの」、隣接する吉祥寺の「きち」、井の頭池が市内となる三鷹市の「さん」を並べたものです。（奇数月1日の隔月発行です）

『いのきちさん』のホームページができました！更新中！
<http://www.inokichisan.com/>

『いのきちさん』の感想やお問合せはメールでも受付けています。
✉ inokichi@bun-shin.co.jp

スマートフォン対応

『いのきちさん』を置いていただける所を募集しています。